http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.114　12/11/26

本気から本当の力が

進路を考える時期だが、イイ文が朝日新聞に載っていたので引用しよう。11月25日（日）の「仕事力」より。

＊

何のために人生を使うか

西水美恵子（シンクタンク・ソフィアバンク　パートナー、元世界銀行副総裁）

＜私の人生を変えたある少女の死＞

進路を考えあぐねていた高校時代、日本での閉塞感もあって3年生の時に米国へ留学しています。親の反対を押し切ってそのまま現地で大学へ進み、経済学に出合いました。経済活動における人間の行動や心理を理論的に分析するのも面白かったし、それを政策に結びつけることもできる。筋道がはっきりしていて、これは世の中の役に立つ学問だと思いましたね。

それから一度帰国はしましたが、また米国に戻って大学院を終え、プリンストン大学の助教授として就職しました。学生たちはみんな優秀だし、政策を研究し教えることで、私は世の中の役に立っている。少なからずそう自負していたのです。

プリンストン大学で5年教壇に立った頃、一年間の研究休暇を世界銀行でという誘いがありました。ただ一つだけ世界銀行側から伝えられた条件は、「一国でもいいから発展途上国を訪ね、自分の目で国民の貧しさを見てくること」。その後、世界銀行の視察団に同行してエジプトの首都カイロへ飛び、ある日郊外にある「死者の町」に足を運びました。イスラムの広い墓地に、行き所のない人々が住み着いた貧民街。そこで、病んでいる少女を抱くと、私の腕の中でほどなく息絶えたのです。下痢からくる脱水症状でした。

安全な飲み水に糖分と塩分を入れた、家庭でも簡単に作れるような飲料水で応急手当てができたはずなのに、長い歴史を持つエジプトでなぜ多くの国民がどん底の貧しさの中にいるのか。悲しみと共に、誰の神様でもいいから、ぶん殴りたいと怒りが湧き上がりました。

＜教職を捨てて貧困と闘う道へ＞

ひどい経済政策がもたらす激しい貧富の差を目の当たりにして、「自分は、何のために経済学をやってきたのだろう」という無力感に襲われ、私はもう学究生活には戻れなくなってしまいました。途上国の経済発展を支援するため資金や知識の提供をしている世界銀行に、このまま残ろう。開発を通して貧困と闘いたい、と。

少女の死に強いショックを覚えましたが、それはまた、今まで知らなかった自分の本気に火がついた瞬間でもありました。学んできた年月、体験したこと、つまり自分の持てる力をどうやって役に立てることができるのか。次の仕事へ進んでいく尺度は、その少女になりました。何をしても、「生きていたら喜んでくれるかしら、幸せにできるかしら」と自分に問うことが習慣になっています。

人間は本気になると、はたから見たら無鉄砲でハラハラするようなことも、平気になれるようですね(笑)。するべき仕事に対して捨て身になる。私は、そこから本当の力が出てくると思っています。(談)

＊

本気に気づく…これが進路の始まりである。